笑うしかない友‘20

※無断使用許可。改変自由。

目次

1　お日様は笑ってる
2　アヒルとクジラと日本人
3　お昼の血糖
4　桃太郎の居場所
5　スケスケ
6　折れる心
7　北風と太陽と桶
8　玉手箱
9　超平凡
10　就眠儀式
11　地球儀
12　無言電話
13　何曜日
14　大丈夫
15　変装

1　お日様は笑っている

何か用か。九日十日。

（お魚くわえたサザエさん）

私、サザエでございまあせん。私の名前は仮免です。勿論、渾名に決まってマッスル。指をくわえておどおどするのが似ているというのです。仮免、仮免。きっときっと事故に遭います。それで終わりです。笑うしかないのです。裏の畑でボッチが泣く。正直爺さん、意地悪爺さん、自我爺さん、世界に一つだけの花咲かん爺さん。一所懸命に咲いた花なら、散るのは落伍。私の兄は、志村けんでありまあせん。

（そうなんだあ）

遭難です。でも、私も変なおじさんです。

（インチキおじさん、登場）

おじさんは、エジソンでありまあせん。

（そんなの、常識。パッパパラリラ）

ジョーシキって何？　葬式じゃないよね。でも、字は一緒だよね。どっちも意識がない。

（パッパパラリラ。おなかが減ったよお）

私は減ってないよ。君は減ってんだね。朝ごはん、食べた？　食べた。お昼は？　食べた。夕ご飯？　食べてない。ははあ、だからか。違う？　まだ三時。そうか、三時に夕ご飯は食べないっと。お勉強になりまあす。

（おなかが減ったよお）

晩ご飯、食べた？　いや、今日のじゃなくて、昨日の。食べた。何、食べた？　忘れた？　忘れたから、おなかが減ったような気がするんだぞ。錯覚だよ、それ。錯覚って知ってる？　三角じゃないよ。三角形は、てえへんかけるう……

（……割る２？）

てえへんだ、てえへんだ、閉店だ、倒産だ。父さん、母さん、降参だ。

（割る２！）

大変だあ。

（ハミジ！）

恥見だろう。

（ハジメ？）

泣くよ、鶯。

（ホーホケキョ！）

ご名答。

（おなかが減ったよお）

だから、それ、聞いたって。私は減ってないって、そう言ったろ？　忘れた？　覚えてる。覚えてるのに、なぜ、同じこと、言わす。だから、叫ぶなって。うるさいなあ、もう。何か食べたいんだろう。わかってるよ。でもね、私は食べたくない。そりゃ、食えと言われたら食わなくもないが、だからって、何でも食べます、よく噛んでってえわけじゃないのさ。好き嫌いはある。でも、子どもは駄目だよ、好き嫌い。子どもに生まれたことを悔やむんだな。おじさんは生れたときからおじさんだよ。

（お腹が……）

うるさい！　もう、いい。もういいもういいもういい。腕白質が足りないよ。何か食べたいんなら、食べたいって、最初から、そう言え。わかってたんだ、食べたがってるって。はあ、わかってたって知ってたか。こっちだって、知ってるって知ってたぞ。じゃ、これ、食え。お子様方のだ〜い好きなピーマン。じゃ、これ。お子様方のだ〜い好きな人参。ピーマンとかけて人参と解く。その心は、どっちもどっち。そこにあるって？　そこって、どこ。どこ、どこ、どこから来るのか、黄金バット。ワハハハハハって知らないか。蝙蝠だけが知っている。ああ。寄るな、触るな、濃厚接触。これは違うんだよ。ちょっと事情が、恋をするのも家庭の事情、チャッチャ、チャウチャウは中国の食用犬。駄目。だあめえ。これはね、子どもの食べ物でありまあせん。大人が食べるものなのでえす。お口に、ぽい。むしゃむしゃむしゃ。もぐもぐもぐ。はあ、ごっくんこっと。ひええ、まずい。まずいなあ。こんなもん、子どもにはとても食べさせられまあせええん。子どもが食べると、絶対、きっと、多分、

もしかしたら、よくないことが起きまあす。本当は大人が食べてもよろしくないので有馬温泉。あれ、まあ、混線。晴れ間。雨間。雨、雨、晴れ、晴れ。
（飴、飴、くれ、くれ）
成長は認めよう。では、また、来週！
（おじさんは偉い人。そんなの、冗談）
時間よ、止まれ！
（お魚くわえたサザエさん。今日もいい天気）
昨日もいい天気。一昨日もいい天気。一昨昨日も――
（パッパバラ……）
おかみさん、時間ですよお。
（お腹、お腹――）
お魚くわえたドラ猫を追いかけて、裸で、いや、肌出して、いやん、歯出して、走り出して、は、尻出して、は、は、はあ、はあ、はあああああああああああ、小指が、小指がいうことをきかなあああああああ……　（もう、笑うしかなあああ……
（みんなも笑ってる？）
（終）

2　アヒルとクジラと日本人

○　むかし、アヒルは体が大きくて、クジラを食べたよ。
■　いいえ。むかし、クジラは体が小さくて、アヒルに食べられたのです。
○　クジラを食べたのは日本人だよ。
■　日本人とは何ですか。
○何だよ。
■　日本人とは、日本語を話したり聞いたりできるヒトのことです。
○　じゃあ、パックンも？
■　そうです。
○　じゃあ、イーデス・ハンソンも？
■　彼女は、日本人というより、大阪人でしょうね。
○　大阪人は日本人じゃないの？
■　大阪人にお聞きなさい。
○　募ったが募集してないって人は？
■　ヒー・イズ・ア・ベビー・バラバラ。
○　トゥ・ビー・トゥ・ビー・テン・メイド・トゥ・ビー。
■　ユー・マイト・シンク・バット・トゥデイズ・ホット・フィッシュ。
○　オー・ショー・ガッツ。

■　苦しみます釣り。
○　掘った芋弄るな。
■　どう湯呑み？
○　具もニンニク。
■　具、倍。
○　具、無い。
■　産休。
○　選球。
■　ずうっといたいな、動物園。
○　俺んじゃないよ、このミカン。
■　日本語を取り戻します。
○　僕は日本人だよ。
■　あなたはヒトではありません。
○　ヒトデじゃないよ。
■　ヒトなら、クジラに食べられてみなさい。
○　どうして。
■　ヒトはクジラに食べられるものなのです。
○　嘘だい。
■　そう書いてあります。
○　どこに？
■　四行前を読みなさい。
○　子どもだから読めません。
■　読めてもわからないのでしょう。
○　ヒトじゃなくても、クジラに食べられるよね。
■　あなたのような人形のことですね。
○　人形じゃない。
■　嘘をつくと、鼻が伸びますよ。
○　だって、しゃべれるもん。
■　ほら、鼻が伸びました。
○　伸びてない。
■　あなたは自分が何を言っているのか、わからないのです。あなたは腹話術の人形のような存在です。あなたが言っていることは、全部、私が考えていることなのです。
○　別の人とも話せる。
■　そのときも、やはり、あなたが言っていることは、相手の考えていることなのです。
○　だったら、お茶飲めず博士のボーッとピープルの脳味噌、だらだら、おつむにおむつの病院、紹介しようか、ははあ、あんたがこの間まで入院してたとこね、当意即

妙病、わかるかなあ、わかんねえだろうなと、にやける夕焼け小焼けのバカトンマがおっとっとっと、豚コレラと我々は豚飼うぞ、とんとん頓馬天狗の頓馬なマント、天狗の軍手、言葉をおもちゃのチャチャチャ、日本ポーンポ懲りん星のコブタヌキツネコぶたれる太鼓持ちの気持ちって、わかるかな、わかってたまるかって思ってんの？

■　思わずに考えています。

○　じゃあ、今、僕が言ったの、どういう意味。

■　意味とは何でしょう。

○　と、僕が思ってるんだよおだ。

■　私が考えているのです。

○　と、僕が思ってるんだよおだ。

■　本当のことを言いましょうか。

○　と、僕が思っているんだな。

■　私は人形です。

○　と、僕が思っているのか。

■　私の鼻は伸びていますか。

○　伸びてない。

私は嘘を申しません。

○　見え透いてる。

■　私が嘘をつくような人間に見えますか。

○　何も見えてないんだよ。

■　イマジン。

○　閑人。

■　肥満児。

○　見えないくせに。

■　僕は、本当のこと、言う。

○　およしなさい。

■　何でだよ。

○　日本人になれませんよ。

（終）

3　お昼の血糖

先輩　さあて、お昼だ、お昼。ね、食べなくちゃ。

新人　……

先輩　もう。そろそろ、お昼、食べないとさ。ねえ。ねえったら。

新人　えっ。僕っすか？
先輩　君しかいないっしょ。
新人　はあ。そうみたいですね。
先輩　何よ、わざとらしく見廻したりしてさ。
新人　ええっと、何でしたっけ。
先輩　だから、お・ひ・るう。
新人　はい。
先輩　時計、見ない。
新人　見ません
先輩　見なくても、わかってるよね。
新人　あっ、腹時計ってやつ？　ああ、そうか。成程。
先輩　じゃなくて。うん、でもいいけど。ていうか、わかってんじゃん。
新人　さあ？
先輩　だからさ、お昼、食べなくちゃってば。
新人　えっ。僕っすか？
先輩　そうよ。決まってんじゃん。
新人　先輩じゃなくて？
先輩　私もだけど。
新人　まじっすか。
先輩　まじまじ見ない。
新人　食べません。
先輩　血糖値、気にしてんだ。
新人　ただの主義です。
先輩　どういう主義よ。
新人　さあ？
先輩　この間、食べてたじゃん。
新人　あれは例外っつうか、主義の前。
先輩　いつから主義なの。
新人　さあ？
先輩　もしかして、今日から？
新人　さあ？
先輩　さあばっか。
新人　先輩も主義なんすよね。
先輩　何が。
新人　ランチ、食べるの。
先輩　主義じゃないよ。

新人　じゃあ、義務ですか。
先輩　義務なんて。まあ、マナーね、日本人の。
新人　マナーって、日本人の言葉ですかね。
先輩　規準？
新人　平仮名で言うと？
先輩　めやす、かな？
新人　条例か何かで決まってんすかね？
先輩　なわけない。
新人　ご自分でお決めになったんじゃありませんか。
先輩　まあ、そうね。
新人　僕は食べないって決めたんです。でも、僕は僕の私生活に関する決め事を他人に強いたりは致しません、たとえ相手が後輩でも。強いたら、パワハラになりかねませんからね。
先輩　私がパワハラやってるっての？
新人　そのようなことは言ってございません。
先輩　慇懃無礼。
新人　四字熟語は中国語。
先輩　おなか、すかないの？
新人　すきません。
先輩　朝は？
新人　食べません、タイパ。
先輩　じゃあ、一日一食？　かえって体に悪いのよ。
新人　いいえ。食べたい時に食べたい所で食べるのが僕の主義です。個人的には、早弁になりますけどね。
先輩　私だって、そうよ。昼になると、食欲が出るのよ。
新人　じゃあ。「食べなくちゃ」じゃなくて、「食べたい」でしょう。
先輩　食べたいに決まってっじゃん。
新人　あのお、先輩、前から気になってたんですけど、義務と欲望を混同してません？
先輩　何よ、それ。
新人　三十五歳までに結婚したいのか、結婚せねばならないのか、ちゃんと区別できてます？
先輩　それってセクハラよ。
新人　先輩がランチを食べたいと欲望すると、僕にランチを食べる義務が生じるのでしょうか。そうだとしたら、パワハラですよね。
先輩　何よ、もう。君の分、わざわざ、作ってきてやったのに。
新人　どうせ、定番でしょう。
先輩　定番って？

新人　ウィンナ。
先輩　嫌い？
新人　嗅ぐと、やりきれない気分になる。
先輩　どうして？
新人　便所臭い。
先輩　へえ、そうなの？　男子便所って、そうなんだ。
新人　女子便所も一緒ですよ。
先輩　何で知ってるかな。
新人　くふふ。
先輩　あっ、そうか。君、私に隠れて早弁したんだ？
新人　はい。
先輩　いつよ。
新人　三十分ほど前になりますかね。
先輩　どこで。ちゃんと答えなさいよ。「さあ」は禁止よ。
新人　便所。
先輩　キエーッ！　もう、いい。消えろ！
新人　それって……
先輩　そうよ。パワハラよ！　めらめらなんだから。
新人　でもあるけど、根はセクハラ。あなたはパワーとセックスを混同している。義務と欲望を混同している。日本語と外国語を混同している。理性と感情を混同している。本音と建前を混同している。男と女を混同している。今の自分と二十歳前後の自分を混同している。誰かと僕を混同している。午前と午後を混同している。夢と現実を混同している。
先輩　えっ、これって夢なの？　君も夢？
新人　えっ。僕っすか？
（終）

4　桃太郎の居場所

若人　僕は桃から生れたのだ。
老人　腿の間からだろう。
若人　字が違う。
老人　モモちゃんはどこからやって来たのかね。
若人　川上から。
老人　川上にゴルフ場があったのだね。
若人　ない。
老人　芝刈りのおじいさんは皮で選択をしているおばあさんにモモちゃんを送り返したの

だね。
若人　字が違いすぎる。
老人　モモちゃんはゴルフ場で働いていたのかな。
若人　違う。
老人　モモちゃんはゴルフ場のお客様かな。
若人　違う。
老人　お客様のお連れ様か。
若人　違う。
老人　人に聞かれたら、年の離れた姉さんと答えるよう、教えられたのだね。
若人　違う。
老人　年の離れた鬼さんはどうなったのかな。
若人　知らない。
老人　モモちゃんと鬼さんはどこで出会ったのかな。
若人　出会ってない。
老人　君は年の離れたお兄さん退治に行く途中なのかな。
若人　字が違う。
老人　鬼が島に着いたら、鬼はいなくて、モモちゃんがいて、鬼はとっくに殺されてる。
若人　誰が殺したの？
老人　モモちゃんだよ。
若人　話が違う。
老人　君、いい気味団子を持っているよね。
若人　持ってない。
老人　わんわん。オコシを一つ下さいな。
若人　持ってない。
老人　キャッキャッ。オコシを一つ下さいな。
若人　持ってない。
老人　ケンケン。オコシを一つ下さいな。
若人　持ってない。
老人　鬼にオニギリを一つ下さいな。
若人　もう帰る。
老人　帰る所はないぞ。
若人　鬼に滅ばされたのかな。
老人　本当の話を止揚か。
若人　字が違う。
老人　むかしむかし、おじいさんは山へ芝刈りに行って崖から落ちて帰らぬ人となり、おばあさんは選択をしに行って皮に落ちて帰らぬ人となったので、モモちゃんは、どんぶらこ、

どんぶらこと、何事もなく川下へ流れ去りましたとさ。めでたし、めでたし。
若人　話が違う。字も違う。
（終）

5　スケスケ

第一場

オジ　おまえか、フユミの男、盗ったってのは。
キキ　知らない。フユミって誰よ。ていうか、あんた、誰。
オジ　そんなこた、どうだっていいんだ。盗ったんだよな。
キキ　盗らない。
オジ　へえ、じゃあ、もう捨てたか。
キキ　捨てるわけないじゃん。
オジ　じゃあ、盗ったんだ。
キキ　ばっかじゃないの。
オジ　何だと。もう一遍言ってみろ。
キキ　盗ってないし、捨ててもない。
オジ　ばっかはおまえだろう。盗ったか、捨てたか、どっちかだろう。
キキ　あんた、絶対、頭、おかしいって。
オジ　盗ったに決まってっだろが。そんな透け透けのブラウスなんか着やがって。そんなにまでして男が欲しいのかよ。
キキ　透けてないもん。
オジ　透けてんだよ。計算だろ、夕日しょってブラジャー透けさせて髪を靡かせてぼんやり突っ立ってたら男が寄ってくるぐらい、わかってるくせに。おまけにコーラの瓶まで舐めてやがる。
キキ　知らないってば。だいたい、ハルミって誰よ。
オジ　ハルミじゃない。
キキ　ナツミ？
オジ　フ・ユ・ミ。おまえの名は？
キキ　じゃなくて、フユミの男って誰よ。
オジ　へえ。そんなに何人もとやってんだ。
キキ　そりゃ、まあ。でも、一度に一人だよ、糊代は別だけど。
オジ　糊代のことは思い出せないか。
キキ　思い出さないようにしてる。
オジ　思い出させてやるよ。
キキ　もう、うるさいんだけど。

オジ　おい。フユミ。ちょっとこっち来い。
キキ　あれがフユミ……ちゃん？
オジ　知ってんだろ？
キキ　し、知らない。見たこと、ない。話なんかも、したこともない。
フユ　ハーイ。フユミで〜す。ねえ、あんた、ちょっとあっち行ってて、女同士でナシ付けっからさ。
　　第二場
キキ　フユミってんだ。
フユ　まあね。
キキ　うふふ。
フユ　ありがとう。ちょっと瓶貸して。
キキ　あ、これ？
フユ　そう。ちょっと、あいつに見られないようにね。はい、どうぞ。バイト代。
キキ　わあ。こんなにもらっちゃっていいのかな。
フユ　いいのよ。どうせ、あいつの金だもん。
キキ　すっご〜い。遣り手だね。
フユ　ちょっと話そうか。時間稼ぎ。
キキ　素敵な元彼って、どんな人。
フユ　あはは。そんなの、いるわけないじゃん。
キキ　そうなんだ。
フユ　あいつ、しつこいから、別れようって言ったら、男が出来たのかって聞くんだ。
キキ　出来たんだ？
フユ　まあ、まあ。その話は置いといて。だから、口から出まかせで、元彼のことが忘れられないって言ったの。そしたら、俺が取りもどしてやるって。
キキ　こえ。
フユ　しょうがないから、もう、彼女いるんだって言っちゃった。
キキ　そしたら、会わせろって？
フユ　その彼女の役をあんたがやってくれたわけよ。
キキ　ふうん。
フユ　もう、いいや。バイバイ。
キキ　バイバイ。頑張ってね。
フユ　うん。
　　第三場
フユ　は〜い。済んだよ。
オジ　どうなった。
フユ　もう、彼女とは別れたって。

オジ　なあんだ。そういう男なんだぞ。わかったか。
フユ　わかった。
オジ　じゃ、諦められるよな。
フユ　ううん。逆。もっと素敵だって思った。港を出て行く船のような人がいいの。ごめんね、素直じゃなくって。
オジ　同じ星に生まれたから、よくわかる。待ってな。
第四場
オジ　おおい。おまえ。
キキ　ひえっ。何で？　話、終ったよ。
オジ　いいから、教えろ。
キキ　何？
オジ　おまえの元彼が今付き合っている女。
キキ　知らない。
オジ　どうして？
キキ　知るわけないじゃん。
オジ　おまえもあの男に未練があるのか？
キキ　ない、ない。
オジ　どうして？
キキ　プレーボーイはお断り。
オジ　一途なのが好きなんか。
キキ　うん。好き。
オジ　俺、一途だぜ。
キキ　あら、素敵。私と付き合ってみる？
オジ　いいのか。でも、あいつがなんて言うかな。
キキ　わかった。話してくる。ここにいて。
オジ　おう。
第五場
キキ　お待たせ。
フユ　待ってないよ。どうした、あいつ。
キキ　私のこと、口説いてくんの。
フユ　ふへえ。で？
キキ　オーケーした。
フユ　趣味悪。
キキ　嘘よ。人助け。その代り、キャッシュね。
フユ　えええっ？　今、ない。
キキ　じゃあ、あいつが人質ね。

フユ　意味、わかんないけど、いくら？
キキ　さっきの二倍で、どお？
フユ　まじ？
キキ　まじ。できたら、色付けてね。
フユ　狡い。
キキ　どっちがよ。じゃあ、明日の今頃、さっきのお店で。
フユ　うん。バイバイ。
キキ　バイグー。
フユ　あっ、でも、大丈夫。あいつ、しつこいよ。
キキ　平気。怖いお兄さん、ついてるから。
フユ　えっ。じゃ、あんたも？
キキ　そう。こわ〜いお姐さんよ。
フユ　あわわ。お見それ致しました。では、明日、必ず、きっと、はい。
キキ　リ！

第六場

キキ　おまた〜。
オジ　済んだか。
キキ　泣いてたわよ、あの子。この女泣かせ。
オジ　そうか。でもな、そういう男が好きなんだって、あいつ。
キキ　ふう。妬けるう。
オジ　くふ。そうか？　俺、ひょっとしてモテ期？
キキ　そゃあ、もう。モテモテよ。さ、行こ。
オジ　いずこへ？
キキ　地獄の底まで。
オジ　付いて行く。
（終）

6　折れる心

俺　おい、一発殴らせろ。
儂　誰だね、君は。
俺　誰でもいいから、殴らせろ。
儂　誰でもいいんなら、他のやつを殴りたまえ。
俺　いや、おまえじゃなきゃ駄目なんだ。
儂　なぜ？
俺　おまえが俺の女を盗ったからだよ。

儂　君の女って？
俺　しらばくれるな。
儂　盗るってどういうこと？
俺　盗られた者の気持ちにもなってみろよ。
儂　盗るの意味がわからないのに、どうして盗られた者の気持ちがわかるんだね。
俺　うるさい！
儂　俺の女って、どういう意味？
俺　うるさい！
儂　ああ、もしかして翼のこと？
俺　やめろ。
儂　何を？
俺　言うな。
儂　だから、何を？
俺　その名前だよ。
儂　翼？
俺　言うな！
儂　翼、翼、翼。
俺　ああ、もういい。殴ってやる。ブン！
儂　ヒョイ。
俺　おぬし、できるな。
儂　空手、黒帯。押忍。
俺　しまった。
儂　ピンポンも黒帯。お酢。
俺　くそ！
儂　こらこら、逃げなさんな。
俺　前に回られた。
儂　バスケも黒帯。牡。
俺　大学も？
儂　黒帯。牝。
俺　だからって、人の女を盗っていいってことにはならないぞ。
儂　盗られた者の気持ちって、どういうの？
俺　心が折れるんだよお。
儂　君の心って棒なのね。爪楊枝かな。心はハート型だと思うけど。だったら、割れる。心が折れると、どうなるの？　折れ曲がるわけ？　千切れるの？　折れたの、修理できない？
俺　もう、いい。
儂　いや、よくない。ちゃんと答えなさい。心は折れて、どうなるのか。折れる心を体中に

感じると、どうなるのか？　人を殴りたくなるのか？　わけもわからずに殴られる者の気持ちがわからなくなるのか？

俺　えらいのに会っちゃった。

儂　ことによると、君は淋しい人間なんじゃありませんか。

俺　何？

儂　私は淋しい人間です。

俺　怖い、怖い、怖い。

儂　翼、翼、翼。

俺　やめて、やめて、やめて。

儂　ちゃんと答えなさい。答えるまで君を殴り続けよう。

俺　何でだよお。

儂　人生はワン・ツー・パンチ。ボカスカ。

俺　ひええ。何でも聞いて下さい。

儂　翼って何？

俺　えっ？

儂　聞こえないのか？　君は翼のことを何だと思ってるの？

俺　だって、さっき。

儂　翼、翼、翼。

俺　ああ、やめて。彼女って言って。

儂　いいけど、でも、彼女はもう君の彼女じゃないんだろう。

俺　じゃあ、あの子。

儂　彼女は未成年だったのか？

俺　じゃあ、あの人。いや、あの人は言いにくいな。

儂　彼女は君と結婚していたのか。婚約でもしていたのか。

俺　いや、そんな。

儂　じゃあ、君の女って、どういう意味だ。

俺　付き合ってた。

儂　付き合うってどういう意味だ。性行為を飽きるほどやったということか？

俺　いや、まだ。

儂　キスぐらいはしたんだろうな。

俺　いや。

儂　彼女が裸を見せてくれたのか。

俺　いや。

儂　じゃあ、彼女が風呂に入っているところを何度も覗いたんだな。

俺　何度もって。

儂　何度だ。

俺　いや、はい、あの、一度。
儂　二度だろう。
俺　え、まあ。はい。
儂　何時間。
俺　いや、そんな。
儂　時間を忘れるほどだね。
俺　やめましょうよ。
儂　そのとき、君の右手、もしくは左手はどこにあった。
俺　勘弁してよ。
儂　彼女は、君と付き合っているとは言わなかったぞ。
俺　ええ、ま、まあ、そこはその、彼女の気持ちを大事にしたい。
儂　翼とは別れたよ。
俺　えっ？
儂　翼は元気になってね、元彼を追って大空へ飛び立ったよ。
俺　元彼って、もしかして？
儂　君じゃない。
俺　誰？
儂　私の元彼。
俺　えっ？　じゃあ、じゃあ、彼女って本当は？
儂　ああ、心の折れてたエンジェル。
俺　みんな、飛べないエンジェル。
（終）

7　北風と太陽と桶

主　北風が吹けば桶屋が儲かる。
客　どういうこと？
主　北風が吹くと、寒いよね。旅人は宿屋に着くと風呂に入りたがるのだね。だから、宿屋の主人は風呂桶を用意している。だから、桶屋が儲かるわけだよ。
客　太陽が照ると？
主　暑いよね。旅人は宿屋に着く前に川で水浴びをするのだね。だから、宿屋の主人は風呂桶を用意していない。だから、桶屋は儲からないわけだよ。
客　嘘だね。
主　本当はね、北風が吹くと、寒いよね。旅人は風邪をひいて、宿屋に着くと死んでしまうのだね。だから、宿屋の主人は棺桶を用意している。だから、桶屋が儲かるわけだよ。
客　太陽が照ると？

主　暑いよね。旅人は宿屋に着く前に熱中症で死んでしまうのだね。だから、宿屋の主人は棺桶を用意していない。だから、桶屋は儲からないわけだよ。
客　嘘だね。何でそう嘘ばっかりつくの。
主　日本人だからだよ。見猿、言わ猿、聞か猿。イエロー・モンキー。家畜人。自粛、自助、自制、自己責任、自業自得、自縄自縛、自己嫌悪、自暴自棄、自己破産、自重、自嘲、自虐、自滅、自殺、自害が日本文化だからだね。
客　本当のことを言うと、どうなるの？
主　干される。
客　太陽に？
主　秘すれば花。
（終）

8　玉手箱

主　これ、何だと思われます。
客　どれ。
主　これです。
客　だから、どれ。
主　これですよ、これ。
客　さっきのこれと今のこれは違うね。
主　一緒です。
客　何が何やら。
主　だから、ここも、ここも、これの一部なのです。
客　ほう。たとえば、私からは見えない君の背中も君の一部というようなことかな。
主　ま、まあ、そういうことです。いいえ、見えていらっしゃいますよ、これ。
客　君の指も、これの一部かな。
主　いや、これは違いますよ。このこれはこのこれとは違って……。いや、ここも、ここも、そしてここも、これです。しかし、これを差す指は、これではありません。
客　では、聞くが、右の人差し指と左の人差し指を合わせると、これはどっちだ。
主　これがこれですよ。
客　君と私の人差し指を合わせて何になる。
主　イーティー。
客　どっちがどっちだ。神か、アダムか。神がアダムを創造したか。あるいは、アダムが神を想像したか。どっちもどっちか。レオナルド・ダックに聞くしかない。
主　ダ・ビンチね。
客　神はアダムから慰撫を創造したが、アダムは慰撫を想像したか。Madam, I‘m　Adam.

主　字が違う。
客　暮れ医務はＷＯＲＤに家。
主　もっとひどくなった。
客　いいかね。こうやって、自分の指と指を触れ合わせるのだよ。すると、さあ、これはどっちの指だ。
主　左です。
客　どうして。
主　私は右利きですもの。
客　左利きの人なら。
主　初対面の人に聞けますか、あなたは右利きですか、左利きですかって。
客　では、聞くが、君は自分の右の指で自分の右の腕が指せるのかね。
主　できますよ、ほら。
客　あれれ。本当だ。柔らかいね。
主　両手を背中で合わせることもできますよ。やってみましょうか。
客　いいよ。今はこれの話をしているのだ。
主　だから、これはこれですって。ほら、これ、これ。私が今上下させている、これ。
客　君はわざとらしく腕を上下させているが、腕がこれかね。
主　いや、私の腕は私の一部ですが、これは私の一部ではないのです。
客　日本は？
主　違います。
客　何が。
主　いや、違いません。これは日本の一部です。
客　いつから。
主　昔からでしょうね。
客　嘘だろう。君はそれをメイド・イン・ジャパンとは思っていないはずだ。
主　じゃあ、何だと。
客　竜宮城の宝物だと思っているのだろう。あるいは、私にそのように思わせたいのだろう。
主　何だ。ご存じじゃありませんか。
客　知らないよ。君がそう思っているのだろうと思っているだけだ。
主　じゃあ、なぜ、最初から玉手箱だろうとおっしゃらなかったのですか。
客　知っているからだよ。それは箱だ。だろう、じゃない。だ、だ。私はそれが箱であると確信している。箱だと思っているのではない。君だって箱だとわかっているはずだ。だから、私が、わざわざ、それは箱である、えっへん、などと威張っている場合ではなかった。
主　では、どんな箱だと思われますか。
客　だから、ただの箱だよ。骨董屋でいくらしたか、知らないけど、竜宮城から浦島太郎が持ち帰った玉手箱だとは思わない。他の何だとも思わない。

主　あっ。そういうこと。
客　そういうことって、わかっているのかな？
主　わかります。わかります。
客　では、聞くが、君は自分のことを何だと思っているのかね。
主　うう。
客　正直に答えなさい。
主　言えません。
客　言いたくありません、だろう。
主　うう。
客　よし。今日はこれぐらいにしといてやる。とっとと帰りたまえ。君が帰らなければ、私が帰る。蛙が鳴かなくても帰る。
主　いえいえ、それはなりませぬ。
客　落ちを忘れてかなりいやか。
主　カナリヤね。
客　落ちなんか、私の知ったことではない。私は落ちのためにこの世に生れてきたのではない。
主　でも、落ちぐらいないと。
客　落ち着かないか。では、聞くが、君は何のために生きてきたのだ。落ち着くためか。十六の夏休みに抱いた夢や希望を忘れるためか。
主　若かった。何もかもが。
客　あのスニーカーは捨てたかい。
主　知らないのです、私は自分が何のために生まれたのか。
客　ご両親は何と。
主　プライバシーの侵害です。
客　そんなにもありのままでいたいのか。
主　レリゴ。
客　では、蟻のパパはどうなる。うちのパパはせっかち。
主　パパは乳牛屋。
客　茄子がママなら、胡瓜はパパ。
主　耳に蛸焼き。
客　蟻が倒産。
主　蚯蚓は線引き。
客　では、それを横須賀。
主　寄越すかね。
客　軽々来たぜ、箱だけ。横幅、縦幅、持てるの、小箱。開けましてお目玉。ぽわ〜ん。げほげほ。開けてびっくり、黙ってパコパコ。

主　ぱたぱた。こんなことになろうとは。
客　煙いことは煙いが、何も起きない。
主　起きてますよ。
客　あれれ。どうしたことか。君がいない。君がいた場所に見知らぬ高齢者がいる。よう、先輩、二千万、持ってる？　持ってたら、ちょいと丁髷。
主　持ってません。
客　半分でいいから卓袱台。せめて范文雀でも帳面。
主　私ですよ、私。さっきの白い煙を浴びたせいで年を取ってしまったのです。
客　君は浦島太郎だったのか。
主　違います。私は普通の人間です。玉手箱の中の煙を浴びると、誰もがあっという間に老化するのです。
客　では、あの白煙はＤＤＴとかＰＣＢとかＰＴＡのようなものだったのか。
主　ちょっと私にはわかりかねます。
客　もしかして、私も老化したのだろうか。廊下は柱ない。誰もが知らない、自分が本当は誰なのか。
主　そうだったのか。誰も教えてくれなかった。
客　あれあれ。ここはど～こ。私はだ～れ。あなたはど～なた。どう～なってんの。夏夏夏夏ここドーナツ売ってんの。愛愛愛愛淫乱どすえと帯解きながら花嫁御寮はなぜ笑むのだろう。ＳＭだから。へらへらへったら、腹へった。
主　呆けちゃった。
客　下関を頼む。
主　下の世話ね。
客　白煙は百円では食えんで。ふがふが。
主　というのが最期のお言葉でした。深々。
客　ぶかぶか。ぷかぷか。ぱぺぴぼぷぴぴぴ。
主　ピッ、ピッ、ピッ、ピ――――
客　おやおや。ついに私もご臨終か。
主　ご中傷様です。
客　夢にも思わなかったな、こんなにもさっさと死んでしまう自分を看取ることになろうとは。
主　何が何やら、ちっともおわかりにならない方でしたね。
客　二千万円は二千円札でナンマイダーメン、略してメンマ・ラーメンということで、本日の死亡遊戯は、これにて獅子舞。
主　おしまいね。
客　今回は落ちがなかったな。
主　残念ながら。

客　私は残念ではない。
主　ところで、その空き箱、どういたしましょう。
客　どれどれ。
主　それそれ。
客　これこれ。
主　あれあれ。
客　やれやれ。
主　獅子舞。
（終）

9　超平凡

知識人　築地と豊洲は今後どうなさるんですか。
頓智人　超平凡しますわ。
知識人　無理です。
不治人　なんでやねん。できんこたないわ。
知識人　ベーグル的に無理なんです。
頓智人　ベーグルだけはきちんとお勉強さなったおつもりでらっしゃるのね。
不治人　理屈ではできるんや。けど、実際にはややこしな。
知識人　いや、ベーグル的に絶対無理なんです。
不治人　ベーグルがドッペルでも同じこっちゃ。
頓智人　お言葉ですか、ドッペル的にはできませんわよ。他社は他者のままですもの。
不治人　築地と豊洲を超平凡するゆうたら、第三の市場をこさえることになるんやで。
知識人　だから、それが無理なんです。
不治人　阿呆ちゃうか。それとこれは別や。理屈ではできるねん。
知識人　逆に、理屈でできなくても、実際にできることはありますよ。
頓智人　あら、レアリストでらっしゃるのね。
不治人　ほしたら、そのレアなリストを見してんか。
知識人　無理です。
不治人　そうやろ。第三の市場は、まだどこにもないんやからな。
知識人　台場指定ではどうでしょう。
不治人　われ、おもろない。要らん。
頓智人　新しい豊洲が理想的な第三の市場になるんですの。
不治人　それくらい、わかっとるがな。けど、ほんまに理想が現実になるんかいな。
頓智人　なりますわ。希望の規模によりますけどね。
不治人　虻蜂取らずいうてな。二都を追う者は一都も得ずや。

頓智人　都になりたがってらっしゃるのね。でも、無理ですわよ。
不治人　なことあるかい。府民の不眠を解消するためやんか。
頓智人　府民と市民はドッペルですもの。超平凡できませんわ。
知識人　そうです。無理です。
頓智人　なんでやねん。
知識人　それはね。
不治人　われに聞いとるんやない。欲求不満なら、風俗、行け。
頓智人　府は市の外苑だからですわ。
不治人　いや、府は市を砲丸するんや。
頓智人　じゃあ、お聞きしますけど、第三の都って、どこになりますの。京都？
不治人　奈良なら？
頓智人　名古屋鳥羽市？
知識人　関ヶ原の戦いを再現するんですか。
不治人　ヒステリーはリバウンドするんやで。二度目は新喜劇や。
頓智人　まあ、失礼な。プンプン。
知識人　さとう珠緒のリバウンドですね。
（終）

10　就眠儀式あるいは長いお休み

南　寝た？
桃　ん？
南　さっきね。
桃　うん。
南　ううん。いつものことだけど、何か言い足りない気がする。
桃　そう。何を？
南　そのときどきで違うわ。
桃　言い忘れた感じ。
南　そうね。そうかもしれない。
桃　たとえば？
南　紅茶が出てきて、その香りを嗅いで、何かが足りない。
桃　レモンね。
南　レモンとは思わないのよ。でも、何かが足りないわけ。
桃　レモンじゃなきゃ、何？
南　レモンと言われてしまえばレモンでもいいんだけど、本当は違うの。
桃　違うような気がするのね。

南　そうそう。いえ、そうじゃなくて。あの、あれ。あっ、あっ。ああ、違った。
桃　今もそうなのね。
南　そうみたい。
桃　わかるわ。私もそうだったの、右脚を失くしたとき。
南　ごめんなさい。
桃　いいのよ。
南　私は何を失くしたのかしら？
桃　現実を認めまいとしたのね。
南　私は何かを失くしたの？
桃　脚がないことはわかってるのよ。でも、ないはずの脚を感じるの、ちゃんと。
南　たとえば、「明日の午前中に来て」と言ったら、何か足りないと思わない？
桃　そう？
南　そう。九時前に来られたら困るのよ。
桃　じゃあ、「明日の午前九時から十二時までに来て」などと言うべきなのね。
南　そう。その「九時から」が思いつかないみたいなことよ。
桃　だって、「九時から」って常識でしょう。わざわざ言う必要、ないわ。
南　そうね。だけど、私が言い足りないと思っていることは、常識とは違うらしいの。
桃　だから、忘れるのね。忘れたいのね。
南　たとえば、「キリンの檻の中にキリンがいない」ってとき。
桃　「いなくて残念」と思ってる。
南　じゃなくて。
桃　「いなくてよかった」
南　外れ。
桃　「檻の中に入れられたキリンは野生のキリンではなくなっている」
南　考え過ぎ。
桃　「キリンじゃない何かがいる」みたいな。
南　違うな。
桃　「キリンが中にいなくてもキリンの檻はある」
南　レモン・ティーのカップには、普通、レモンの薄切りが入っているけど。
桃　果汁を垂らしただけのもあるわ。
南　レモンの香りがするティー・カップの中にはないレモンの薄切りのようなものかな。
桃　そんなもの、要る？
南　要る、要らないじゃなくて。
桃　義足を付けるようになったら、幻の脚の感じが消えたわ。
南　足りないのは言葉の義足？　言葉こそ義足のようなものよ。
桃　言葉にしたくない感情って、誰にでも。

南　そうじゃないの。
桃　わかってる。わかってて言ったの。言いたくなっただけ。
南　怒らせたみたいね。
桃　怒ってないけど。
南　けど？
桃　言葉にならない思いって。
南　違うの。
桃　違うのよね。
南　誰かがあることを言って、それを私は復唱しているみたいなの、ただし、不完全に。
桃　誰かって、誰が、いつ、どこで？
南　私の知らない誰か。
桃　忘れたのね。忘れたいのね。忘れさせられたのね、誰かに。
南　「人間」という言葉の檻の中に私はいない。
桃　どういうこと？
南　檻の中にいない私を私は想像できない。
桃　だから、あなたは檻の中にいるわけね。
南　でも、その檻を私は外から見ているの。
桃　その檻に「人間」と書いた札が張り付いている。
南　私は、いるようで、いない。
桃　いないようで、いる。
南　不完全だから私なの。完全なら、私ではないの。
桃　私は不完全な人間ね。
南　ごめんなさい。
桃　いいの。
南　やめよう、こんな話。
桃　続けてて。
南　もう遅い。
桃　いいの。
南　あなたは眠るのね。眠れるのね。
桃　あなたが起きててくれるから。ありがとう。
南　……お休み。
（終）

11　地球儀を俯瞰しながら

司会　事実は小説寄りと申しまして、何でも聞いて何でも知って何でもかんでも知ったか

ぶりしよう。というわけで、司会の池内人根でございます。本日はこの頃地球人を悩ませているらしい怪獣を懐柔するお仕事に拘っているらしい方々の中から六人を除いて御一人様をお寝間着いたしました。こんにちは。

隊員　今晩は。

司会　夜じゃないので、こんにちはでお願いします。

隊員　夜でしょう。

司会　いえ、放送時間が。

隊員　ほう、そう。

聴衆　けっけっ。

司会　こんにちは。

隊員　こんにちは。

司会　自己紹介をお願いします。

隊員　さっき、やったよ。

司会　あれは打ち合わせのとき。

聴衆　げらげら。

隊員　芝居はしない。

司会　まあまあ。

隊員　オー、ママ、ママって、貴様、マザコンだな。

司会　おお、何ということでしょう。

聴衆　負けないで。ママ、ここにいるわよ。

隊員　あれがママか。

司会　は、はい。来ないでって言ってんだけど。

隊員　私めは何をか糞、地球儀防衛隊の秘密基地でマッチポンプのガス抜きを担当して二日目者であります。敬礼。

聴衆　敬礼するのよ。敬礼。

司会　マッチポンプとはどのような物でしょうか。エゴのマスクみたいな？

隊員　何？　貴様、秘密兵器について、平気で口にするのか。

司会　だって、今。

隊員　ああ、そうか。失礼。ガスを吸い過ぎて記憶が薄れがちなのであります。

司会　お名前の方を伺っても大丈夫でしょうか。

隊員　「お名前の方」とはどっちの方角だ。

司会　いえ、「お名前」で大丈夫です。

隊員　何をか糞、故あって名は名乗れぬ。隊員番号は三十五億六千万……

司会　お待ちします。

隊員　隊員番号は三十五億路線バス……

司会　……

隊員　約四十億番だ。
司会　死者母乳。
聴衆　私への嫌味？
司会　違うよ。違うけど、ごめん。
聴衆　もういい。泣いちゃうから。
隊員　芝居は嫌いだ。
聴衆　狂言の自由よ。
司会　怪獣の懐柔策としてはどのようなものがありますか。
隊員　我々はあれを「怪獣」とは呼ばない。したがって懐柔策はない。
司会　では、何とお呼びでしょう。
隊員　Ｐ！
司会　Ｐですか。
隊員　いや、Ｐは消音だ。この名前は放送倫理規定に反するので、ここでは口にできない。
司会　では、Ｐで結構です。
隊員　結構、毛だらけ、猫、灰だらけ、尻の周りはＰだらけ。Ｐ真面目。Ｐ力。
司会　言ったのと一緒じゃないですか。
隊員　すると、Ｐも禁使用後になりましたか。では、Ｑにしましょう。
司会　同じこと。
隊員　あっ、Ｑも言えなくなった。すると、Ｒ……も駄目だな。
司会　いいんですよ。Ｐで行きましょう。
聴衆　ピーは駄目よ！
司会　どうして。
聴衆　それをまだ女であるこの私の口から言わせようっての？
隊員　まだマダム、そのピーじゃないんです。ただのＰで。
聴衆　ただって、ただのレイプじゃないの。
司会　何の話？
隊員　Ｐの話ですよ。
聴衆　お黙り。
隊員　小田真理さんこそ黙れ。
司会　いえ、あの人は池内です。
聴衆　旧姓は違うわ。
司会　そうなんだけど。
隊員　旧姓は何ですか。
聴衆　パリピ。
隊員　え、じゃあ、ポレプリ村の？
聴衆　ポーポー。

隊員　ピピ？
聴衆　ププッピドゥ。
隊員　パッパマラリア。
司会　約四十億番様。あなたもドキン星からいらした？　違う？　禁制語のドキン語を秘密基地で学んだ。じゃあ、Ｐはドキン語で何というんですか。
隊員　何をか糞、ピピプ。
司会　ああ、秘密ね。
（終）

12　無言電話

またか。

またかよ。どうした。痛むのか。手か、足か、腹か。胸？　頭？　まさか心などと、グリコのおまけみたいな話をするつもりではあるまいね。ははははは。

笑えもしないのか。何か言いなさいよ。嘘でもいいからさ、いくらでも、好きなだけ。ただし、誰にでもわかる言葉でね。へん。

また君か。旅に出なさい。君のことを誰も知らない国へ行きなさい。そこで暮らすさ。死ぬのも自由。ふん。

いつだって同じことばかり、考えてしまうのだろう。なぜ、考える。考えないと、いやなことを思い出すからだろう。だったら、いやなことが起きる未来を想像したまえ。ウイルスで人類が滅ぶとか、異常気象で飢饉になるとか、新月の夜、帰り道で私に襲われるとか。あっはっはっ。

いつから痛むんだい。うん？　言わないな。何も言わない気だ。ふざけやがって。

また君か。いい加減にしないか。

また君か。もっとカルシウムを摂るんだね。

君のこと、ちょっと調べさせてもらったよ。君の両親のこととか。彼らもまともな人間じゃなかったようだね。当然か。

叫び声が聞こえるんだろう、君だけに。大きな木の下に立って梢を探すけど、見つからないんだろう、鳥の巣が、鳴き声は聴こえるのに。

隙間風が冷たいのに、隙間が見つからないんだろう。探し回るうち、くたびれて坐りこみ、壁を背にして眠るんだろう、拗ねた猫みたいにさ。担架で運ばれていたときの自分がありありと目に浮かぶんだろう。

また君か。まだ痛むのか。キリンの今にも折れそうな細長い首を、いつ折れるかと見ているうちに、風邪でも引いたんだろう。お茶でも飲みなさい。

お茶は飲んだか。

その痛みは君のものではなく、他の誰かのものだとは考えられないかね。君に痛みを私有

する権利があるのかね。少しは考えることもしなさい。
　またか。その手は食わんぞ！　いくら貧しくったって幸せなら、どこからもクレームは来ないはずだろう。違うか？　えっ？　違うか？　まだ黙ってやがる。苦しみを表現するときに苦しみたくないのなら、君に生きる資格はないぞ。簡単な話だ。
　誰もが罠に陥る。誰もが赦しを乞う。誰もが指輪に合う指を探す。そのうち、指輪を失くすのさ。
　祈りなさい。痛いの、痛いの、飛んでけ。
　何度も言ったよ。祈りなさい。飛んでけ。
　また君か。ただの噂だって。フェイクさ。君はいないんだよ。まだわからないのか。
　本当のことを言いなさい、誰にもわからない言葉で、私にはわからない言葉で。
　まだいるのか。もういないな。……いない。
（終）

13　何曜日

主　今日が何曜か、わかりますか。
客　話したくない。
主　わからないんですね。
客　あんたとは話したくない。
主　わかるか、わからないか、それだけも答えてくれませんか。
客　やだよ。
主　わからないんですよね。
客　あんたとは話したくない。
主　どうして。
客　あんたが日本語を知らないからだ。
主　えっ？
客　「えっ」じゃないよ。
主　はあ？
客　「はあ」じゃないよ。
主　今日が何曜か、知らないんですよね。
客　知ってるよ。
主　何曜ですか。
客　うるさいなあ。
主　うるさい？
客　ふう。まあ、いいか。ちょっとだけ付き合ってやる。あんたこそ、今日が何曜か、わかるのか。

主　月曜です。
客　ほらね。
主　はあ？
客　「はあ」じゃないよ。「わかるのか」と聞かれたら、「わかる」あるいは「わからない」のどちらかを答えるのだよ。そんなことも弁えていないのか。
主　なるほど。
客　「なるほど」じゃないよ。
主　なるほど。
客　「弁えていないのか」と聞かれたのだから、「弁えている」あるいは「弁えていない」のどちらかを答えるのだよ。
主　はあ、なるほど。
客　まだ言ってやがる。嘘くさい。
主　なるほど。
客　何か書いてやがる。うんざりだ。しかし、不愉快だから、もうちょっとからかってやろう。今日が月曜日だと、あんた、どうしてわかったの。
主　えっ？
客　「えっ」じゃないよ。「どうしてわかったの」と聞いているんだよ。
主　だって、今日は月曜ですよ。
客　また、はぐらかす。まあ、いいや。我慢してやる。あんたは、今日が月曜だと思ってるんだよな。あるいは、知ってるんだよな。わかってるんじゃないよな。
主　ああ、なるほど。
客　まだやるか。納得してないくせして。
主　曜日はわかるものではなく、知るものだと？
客　へえ、そうなの？　知らなかった。
主　あなたが、今、そうおっしゃったんですよ。
客　言ってないよ。そういう作り話をしそうな口の利き方をしてきたから、話したくなかったんだ。
主　作り話？
客　でなきゃ、妄想だな。
主　妄想？
客　か何だか知らないけどね。興味ないよ。
主　興味？
客　ピチピチ・ギャルなら馬鹿でもいいけど、基礎日本語も習得していない男なんか、豚の餌にもなりゃしねえ。
主　ぶぶぶ豚？
客　ぶうぶう、うるさいなあ。曜日がわかるってこともあるよ。

主　えっ？
客　「えっ」じゃないよ。昨日が日曜日だったと知っていたら、今日はその次の日だから月曜日だとわかるよね。
主　なるほど。
客　いい加減、「なるほど」は止めろよ。
主　口癖なもんで。
客　病気だな。
主　かもしれません。
客　もう終わりにしよう。
主　そうしていただくと、ありがたい。
客　じゃあね。一昨日おいで。
主　そうします。
客　あ、そうそう。今日は月曜日じゃないよ。
主　えっ？　じゃ、何曜。
客　教えな～い。
（終）

14　大丈夫

主　簡単な計算、やってもらっても大丈夫ですか。
客　さあ、どうだか。
主　大丈夫ですよね。
客　さあ、どうだか。
主　無理ですか。
客　無理でもいいさ。
主　じゃあ、問題、出しますよ。
客　どうぞ。
主　6 たす 7 は？
客　13 だろうな。
主　大丈夫ですね。
客　さあ、どうだか。
主　大丈夫じゃないんですか。
客　さあ、どうだか。
主　どうかなさいましたか。
客　なさいましたよ。
主　何か、ご不満でも？

客　ご不満？　人のこと、クレイマーに仕立てようとしてるな。
主　違いますよ。
客　胡散臭い。
主　何か仰りたいこと、あります？
客　ありますね。
主　何でしょう。
客　「計算大丈夫」は意味不明。
主　えっ？
客　「大丈夫」とは、本来、立派な男子のことだ。
主　なるほど。
客　「大丈夫の一言は駟馬も走らす」とか。
主　なるほど。
客　「なるほど」って、ただの時間稼ぎだろう。次、言うこと、考えてる。
主　はい、はい。
客　「はい」は一度でよろしい。
主　はい。
客　立派から、しっかりしたことを形容するようになった。
主　ああ、そうですか。
客　「ダイジョーＶ」ってＶサインを出すのが流行ったな。
主　知ってる。
客　平成になった頃か、「結構」と混同されるようになった。
主　「結構」も、結構、ややこしい。
客　「どうぞ」と言われて「結構」と答えると、断ったことになる。
主　そうですね。
客　その「結構」と「大丈夫」が混同されるようになった。
主　はい。
客　以上。よって、「計算大丈夫」は意味不明。
主　なるほど。あっ、また言っちゃった。
客　あるとき、道端に倒れている人を見た。
主　体験談の始まりかな。
客　私はその人に尋ねた。「大丈夫ですか」
主　すると？
客　彼は「大丈夫です」と答えた、口から血を吐きながら。げほっ。
主　はあ。
客　私は彼を置いて立ち去った。ところが、彼は死んでしまったのさ。
主　おやおや。

客　警察で絞られたね。
主　そうでしょう。
客　そうでしょうかね。彼は「大丈夫です」って言ったんだよ。
主　でも、血を吐いて。
客　血なんか、どうってこと、ないさ。
主　いや、やっぱり。
客　血なんか、ほら、これで。
主　あっ。剃刀。
客　オッカムの剃刀。
主　おっかない。
客　心の断捨離。すうっと。
主　あれあれ。手首、切っちゃった。大丈夫ですか？
客　大丈夫。よくやってる。ほら、傷痕、いっぱいあるぞ。大丈夫の勲章だ。
主　手首じゃなくて、頭、大丈夫？
客　そうそう。最初からそう聞きゃいいのよ。
主　は、はは。はい。いやはや何とも。
客　君は大丈夫か？
主　さあ、どうだか。
（終）

15　変装疑惑

客１　やっ。オオマメだ。おい、オオマメ。どこ、行くんだ。終点までか。
客２　誰だね、君は。
客１　誰だって聞いたね。そうです、あんたが変なおじさんです。
客２　離れろ。
客１　マスクして眼鏡掛けててもわかるんだよ。
客２　何が。
客１　変装するんなら帽子被らなきゃあ。
客２　帽子がどうした。
客１　寒くない？
客２　ない。
客１　じゃ、夏暑いよね、直射日光。
客２　消えろ。
客１　この禿！
客３　そこの坊や、口を慎みなさい。

客２　オオマメとは何ですか。
客１　オオマメコマメのオオマメさんですよ。
客２　何ですか、それ。
客３　漫才師さんです。
客２　その一人に私が似てるんですか。何でしたっけ。
客３　オオマメ。でも、この子は間違ってます。ちっとも似てません。
客２　じゃあ、何で、こいつは。
客３　相方さんと間違えてるんでしょう。
客２　相方って、ええっと、オオマメじゃなくて。
客１　コマメだよ。コマメは禿げてないよ。
客３　禿げてます。あっ、失礼。
客２　いえいえ。
客３　それに、オオマメさんは今コロナで入院してますよ。
客１　じゃ、逃げ出したんだ。
客３　えっ、本当？
客４　あんた、オオマメコマメか。
客２　いえ、私は一人。
客４　どっちの一人だ。
客２　どっちでもないんです。マスク取ってお見せしましょう。
客３　きゃあ！　コマメ。
客１　やっべ！　オオマメ。
客４　いずれにせよ、逃げろ！
客５　正しく逃げろ！
客２　はあ。助かった。密を避けるうまい方法がわかったぞ。オオマメだかコマメだかのふりをすればいいんだ。誤解する阿呆が悪い。こっちは悪くない、全然。うむ。しかし、一応、検査しておくか。……その前に帽子買おう。
（終）